

下商物語

私の下商名教師列伝

寄稿 富田 義弘氏

ひょっこり三十年以上前の随筆が出て来たので懐かしくて読み返してみようと、「……確かに当時の下商は素晴らしい教育を施してくれた」と書き、末尾には「当時の下商の教師は厳しさと温かさを兼ねそなえた名先生揃いであった」とつづけています。因みにこの「当時」とは、私が下商に在籍した昭和二十五年春から三年間のことで、それを回顧した駄文です。

私の少年時代は第二次世界大戦の真つ只中、小学校でさえも授業を割いて教練や勤労奉仕に従事させながら、先生は毎日のように「お前たちはお国のために命を投げ出すんだ」と言ったものです。ところが、夏休みも無い八月十五日に敗戦となると、何日も経たないうちに「デモクラシー」や「デスカッション」などの横文字を連

発し始めたのには驚きました。子供ながら当時の教師に不信感を抱いたものです。そして、新制中学の三年間も全国的な教師不足の補充措置による急造教師が多く、尊敬できる先生は、失礼ながら僅かでした。

しかし、下商に入学してみるとすべて世の中が変わったように一転、校舎や講堂だけでなく、教師の立ち居振る舞い、言動、指導方法など、あらゆることに驚きの連続と感動で通学が楽しくなりました。

何よりも、大野栄三先生は経済の時間に「人口論」や「ゼロの発見」を読むことをすすめ、「日常のことで悩むことがあれば何でもいから紙に書いて出してください」と言って、生徒が提出すると必ず対処の仕方とご自身のお考え

を記して返して下さったものです。このことよって学生生活に生き甲斐を見出した級友も多いだろうと私は思っています。

国語の宮川義閑先生は、宗教にとられない形で「歎異抄」による人間の生き方を説かれ、クリスチャンの米谷美知蔵先生も商業通信の時間に時折り「人の心」についての考察を述べられました。

田辺政子先生はご主人の母堂が樋口一葉の親友で旧姓・伊東夏子といひ、一葉も本名が樋口夏子だったために文学仲間から一葉が「ヒナッチャン」、母堂が「イナッチャン」と呼ばれた由で、多くの秘話を語って頂きました。

教科書どおりの国語だけでなくバスや電車、あるいは町で聞く話にも素晴らしい国語があると教えて下さった立川建章先生、人類はすべて女性の胎内より生まれて太古は男が女に支配されたからこそ争いも少なく成長して来た、と説かれたのは、のちに大学で女性史の講座を持たれた米田泰雄先生でした。

上田強校長と大段一美教頭両先生は進学校偏重を見越して速記指

導の道を選ばれました。だから田鎖速記の田鎖弦一先生を下商に招いて講習会を開いたり、夏期休暇中の十五日間に東京の田鎖研究所で下商生の研修をお願いしたりして優秀な速記検定合格者を排出。私の知るところでは同期のS君と一年先輩の方が国会議事堂で、昭和三十年代に活躍しています。

横山寛亮先生は立川文庫の講談本調の講義で生徒を飽きさせず、ご自身も江戸時代の豪傑伝を何冊か上梓されていました。英語の御喜一先生は川柳、商業の逆瀬川康先生は短歌を授業の折々に話して笑いや感動を誘い出し、商業の西野虎男先生は人生の岐路について熱心に説かれたものです。

(昭和二十八年卒)